

何だろう？ 地震被害想定

減災に生かそう

県第四次地震被害想定

従来の想定をはるかに超えた地震と津波が発生した東日本大震災。
その教訓や科学的な調査、研究による知識等を生かし、地震や津波の被害を予測し、減災を目標に新たな県の地震被害想定が公表されました。

経緯 第四次地震被害 想定とは

静岡県の「地震被害想定」とは、県内で発生することが想定されている地震や津波について、「震度分布」・「津波の高さ」・「津波浸水域」、また、それらに伴って発生する人的・物的被害などを、市町単位で予測したものです。
県では、昭和51年に東海地震説が発表されてから、昭和53年に「第一次」、平成5年には新たに全県域を対象とし、想定項目も広範にした「第一次地震被害想定」を公表しました。

その後、国内外では様々な地震被害が発生し、中でも平成7年の「阪神淡路大震災」は多くの教訓を残しました。そのため、災害対策を見直し新たな被害想定として平成13年に「第三次地震被害想定」を作成し、その後の地震・津波対策は、この想定に基づき実施してきました。
こうした中、平成23年3月「東日本大震災」が発生しました。この大震災は、津波対策のあり方はもとより、地震被害想定のある方にも新たな課題を投げかけました。

そのため、あらゆる可能性を考えた最大クラスの地震・津波まで想定した「第四次地震被害想定」を作成しその第一次報告として自然現象、人的・物的被害想定等を公表したものです。

特徴 地震被害想定 のポイント

ポイント1 2つのレベル

被害想定は東日本大震災の教訓から想定する地震・津波を2つのレベルに分けてあります。

これまでの地震被害想定では、過去数百年に経験した地震・津波を基に想定を行ってきました。

しかし、東日本大震災の教訓のひとつに「想定外」が指摘され、今までの被害想定限界が示されました。そこで今回の想定は、対象の異なる地震・津波を2つのレベルに分けて行うこととし、一つはあらゆる可能性を考慮した最大クラスの地震・津波まで検討した「レベル2」と、発生頻度が比較的高い規模の地震・津波を対象に想定する「レベル1」としたものです。

地震被害想定 2つのレベルの地震・津波

区分	規模	想定対象地震
レベル1の地震・津波	発生頻度が比較的高く（駿河・南海トラフでは約100年～150年に1回）、発生すれば大きな被害をもたらす地震・津波	東海地震 東海・東南海地震 東海・東南海・南海地震
レベル2の地震・津波	国（2012）により示された南海トラフ巨大地震のように、発生頻度は極めて低いが、発生すれば甚大な被害をもたらす、あらゆる可能性を考慮した最大クラスの地震・津波	南海トラフ巨大地震

この溝を境界として海側の岩盤が陸側の岩盤の下に沈み込む大規模な活断層であるため大きな地震が繰り返し発生してまいります。

駿河湾から九州東方沖まで続く深さ四千m級の海底の溝があり、これを「南海トラフ」と言います。

Q 南海トラフ巨大地震とは？
A あらゆる可能性を考慮した地震です

国では、東日本大震災の教訓から南海トラフ沿いで発生するあらゆる可能性を考慮した最大クラスの地震・津波を想定し対策を検討することとなりました。
この対象地震が「南海トラフ巨大地震」です。

Q 第一次報告の内容は？
A ライフライン・交通・経済被害及び地域ごとの被害が公表されます。

今後「静岡県第四次地震被害想定」の第二次報告として次の項目が公表される予定です。

- 1 上・下水道、電気及びガスなどのライフライン被害
- 2 交通施設被害
- 3 経済被害
- 4 地域ごとの津波高・浸水深・建物被害など